

4月8日（1学期始業式講話）

今、スタートラインに立つ ～「過去の私」を越えて行け～

今年もまた、あやめが丘に希望の春が巡ってきました。今、私たちは平成31年度のスタートラインに立っています。先月卒業した先輩たちもまた、県内各地で、熊本で、福岡で、高知で、大阪で、新潟で、今、新たな人生のスタートラインに立っていることでしょう。3年生のみなさん、次はあなた方の番です。そして2年生、その次はあなた方の番です。

俳人松尾芭蕉が奥州、今の東北地方に向けて旅に出たのは、1689年、丁度330年前の春でした。旅の日々を綴った紀行文「奥の細道」は有名な序文で始まります。

「月日は百代の過客にして 行きかう年もまた旅人なり」

「百代の過客」というのは「永遠の旅人」という意味です。月日は我々が生まれる前から、またこの世を去ってからも途切れることなく永遠に続く旅人だということです。また、3年生にとっては高校1年生、2年生の時間は二度と戻りません。2年生はあと2年すれば高校時代は終わりを迎えます。つまり私たちの目の前で刻々と過ぎていく時間や月日、年もまた旅人であり、二度と戻らないという、無常観を表現しています。今日という日は、昨日からみれば未来でした。しかし明日になれば過去になっていく。そうやって時間はどんどん過ぎていきます。私たちが生きているのは過去でも未来でもありません。「今」という時間を生きています。「今」という時間を、そして「今日」という日を大切に生きていきましょう。その積み重ねこそが人生です。

世も人生も無常です。今の当たり前が当たり前でなくなる日が必ず来るのが人生です。出会いがあれば別れがあります。スタートがあればゴールがあるのが人生です。「悔いなどあろうはずもない」そう言って28年間の選手生活のゴールを迎えたプロ野球選手がいます。その選手にもやはりプロ野球選手としてのスタートラインがありました。これがイチロー選手のスタートラインです。（オリックス入団会見の写真）この時のイチローはみんなと同じ高校生です。監督の横に座っているのはドラフト1位と2位の選手です。ドラフト4位でオリックスに指名されていますので、後ろに立っています。この年、イチロー選手はドラフトの目玉選手ではありませんでした。12球団が1名ずつ欲しい選手を順番に指名していきませんが、鈴木一朗の名前がコールされたのは41番目です。この華奢で体格的にも恵まれていない選手の28年後の姿がこれです。（東京ドームでの引退試合の写真）

私はプロ野球選手を目指している訳ではありませんが、一つの道でこの高みに上り詰めた人、自分が見たことのない景色を見た人の生き方、つまり人生哲学に学び、自分の人生の道しるべにしたいと思っています。2001年、イチロー選手は、ピッチャーではなく野手として初めてアメリカに渡った日本人選手です。開幕前、筋骨隆々の巨漢ひしめく大リーグで細身のイチロー選手への期待は小さく、「日本に帰れ」という声もあったと言います。しかし、1年目から首位打者、アメリカンリーグMVP、

新人王を獲得しています。

私がイチロー選手の発言に注目し始めたのは、この華々しい活躍をした1年目のオフの時に発した言葉からです。イチロー選手はシアトル市内の小学校を訪れ、小学生にこういう質問を受けます。

「イチロー選手のような一流選手になるには、どうすればいいんですか？」

みなさんなら何と答えますか。私ならば「人一倍練習しなさい」とか努力の大切さを言うと思います。しかし、イチロー選手の答えはこうでした。

「自分のグローブやスパイクは自分で磨ける選手になってください。」

すごいと思いました。技術や練習云々の前に、人として、またスポーツマンとして野球に向き合う姿勢を説いたのです。この姿勢にこそ彼が28年間、プロ野球と言う厳しい世界で超一流であり続けた原点があるのではないかと思います。三振してもバットを投げつけることはしません。フォアボールでもバットは投げずに足もとに置いていく。バッティング練習の後、他の選手たちは芝生にバットを放り投げ中、イチロー選手はクラブでバットを包み、赤ちゃんを横たえるように芝生に置いていたと言います。決して才能があるからではなく、選手として、あるいは人として揺るぎない哲学があるからこそあの高みに上り詰めたのだと思います。心技体の順番どおり、まずは人間性（心）を高めることをおろそかにしては、学習や部活動の向上はあり得ないということです。新年度のスタートにあたり、私は教師として、皆さんは生徒として学習や部活動に、また自分の将来にどう向き合うべきかを考えてください。

引退会見で、ある記者がイチロー選手の「生きざま」について尋ねています。イチロー選手の答えの前にこれを見てください。

A _____

この線は長いですか、短いですか。よく分かりませんか。では、こうするとAという線は長く見えますか、短く見えますか。

A _____

B _____

短く見えますか。では、こうするとどうですか。

A _____

C _____

長く見えますね。でもAの長さは最初からまったく変わっていません。こうやって私たちは他人と比較しながら、自分を相対化することで自分はどういう人間かとか、自分の能力は人より優れているのか劣っているのか判定しながら生きています。例えば、100Mを13秒で走る人が15秒台で走る人たちと一緒に走ると1番になります。しかし、11秒台で走る人たちと走ると飛び抜けて最下位です。こうやって私たちは人と比較しながら己を知り、優越感に浸ったり、劣等感にさいなまれたり、落ち込んだり、「どうせ自分なんか」と思って心を疲れさせながら生きています。ここで大事なことは、喜ぼうが落ち込もうが自分の走力は100M13秒という記録は一切変わっていないという事実です。

そこで、イチロー選手の「生きざま」を聞かれた時の答えはこれです。

「人より頑張るなんてできない。自分の中にあるばかりを基準に、自分の限界をちょっと超えることを繰り返す。その積み重ねでしか自分を超えられない。」

イチロー選手は日米のプロ野球史に残る数々の金字塔を打ち立てました。大リーグの伝説の選手の記録と比較して取り上げられることもしばしばでした。その時のイチロー選手のコメントがこれです。

「比較するのはあくまで自分。他人の記録も尊いと思うが、まずは自分の能力を競わないと」

結局、最終的に何事においてもライバルは自分自身ということです。過去の自分、昨日の自分こそ最大のライバルであるということです。人と比較して「どうせ自分は」という生き方はやめませんか。努力とは人に勝つためではなく、自分を磨くことにこそその本質があるのです。人との比較ではなく、「あなたはどうしたいのか？」そう問うて、一学期始業式の訓辞とします。

最後に、「未来をかえるイチロー262のメッセージ」という本の一節を放送部の●●さんに読んでもらいます。

【未来をかえるイチロー262のメッセージ】

夢をつかむことというのは、一気ににはできません。小さなことを積み重ねることで、いつの日か、信じられないような力を出せるようになっていきます。何かをしようとした時、失敗を恐れなくて、やってください。失敗して負けてしまったら、その理由を考えて反省してください。必ず、将来の役に立つと思います。考える労力を惜しむと、前に進むことを止めてしまうことになります。ムダなことを考えて、ムダなことをしないと、伸びません。過去の積み重ねがどれだけ大事なものは、感じています。それがなければ、今の技術や精神は作れなかったのですから。

「小さいことを積み重ねることが、とんでもないところに行くただ一つの道」

やらされる練習じゃなければ、いろんなことが、上手くまわってきます。「できなくてもしょうがない」は、終わってから思うことであって、途中でそれを思ったら、絶対に達成できません。

苦しいことの先に、新しい何かが見つかると思っています。嫌いなことをやれと言われてやれる能力は、後で必ず生きてきます。いつも、恐怖と不安と重圧を、抱えています。とにかく、ムダなことを、考えることです。考えて、言葉にしようとしているうちに、パツとひらめく。同じ苦しむなら、考えて苦しまないといけない。何も考えないで、ただ苦しんでいても何も生まれません。はじめから、今があったわけではありません。状況は、少しずつ、変えていけるものです。

「小さいことを積み重ねることが、とんでもないところに行くただ一つの道」